



平成 30 年 10 月 25 日

社会の中で創造性を育む大学院教育がスタート ～教育科学による PBL（問題解決）型学習モデルからの発信～

◆発表のポイント

- ・大学院教育学研究科教育科学専攻では、さまざまな専門性が混在する大学院生のチームで、問題解決型のプロジェクト基盤学修（PBL；Project-Based Learning）を利用し、教育科学の力を用いて新たな価値の創出を目的とする学びをスタートさせました。
- ・教育科学専攻の第 1 期生による PBL では、ネパールでの防災教育実践、公民館を起点とする新たなコミュニティの構築、日本の高校でのアメリカの健康教育プログラムの実践など、7 つのチームによる PBL が進んでいます。

地域社会や企業でも、チームとして多様な視点で、地域行事や商品、組織を見つめ、新たな価値を創造する人材が求められています。今まで社会で意識されなかった価値に気づき、モノやコトとして表現し、新たな価値を創出する意欲は、これから大きく変化していく社会で、新たな研究領域の開拓に留まらず、より豊かに生きていくために大切な力です。

このような創造性を育むために、大学院教育学研究科教育科学専攻では、専門の研究を深めつつ、大学院生を創造的なチームリーダーとして、地域社会や企業を牽引できる研究者へと育成する試みをしています。多様な研究の専門性を有するチームメンバーの特性を相互に理解し、課題や目標をチームとして達成するための手法である PBL をカリキュラム化し、今年度スタートしました。今後同専攻では、創造性教育を基盤に、既存の研究領域がよりよく相互作用を行い、新たな価値の創出をめざす研究者が地域や企業で機能するような社会構築を目指したいと考えています。教育科学専攻の第 1 期生による PBL では、ネパールでの防災教育実践、公民館を起点とする新たなコミュニティの構築、日本の高校でのアメリカの健康教育プログラムの実践など、7 つのチームによる取り組みが進んでいます。

<導入>

今日の日本では、外国から来た方、障がいのある方、幅広い年齢層の方など、多様な立場の人が生活しています。これまで当たり前であった価値が、自分と違う立場の人にとって違和感として感じられる社会となっているのではないのでしょうか。これからの多様な社会を創り出す者にとって、既存の価値に面白さや違和感を見つけ出し、社会的や文化的に新たな価値へと変化させたり、場合によっては表現したりしようとする意欲は重要です。ただ、新しければよいというものではなく、近年の研究では、社会的や文化的に適切かつ有効で、倫理が伴うことまでも含めて創造性であると捉えられています。

そして、創造性を育むためには、解決すべき問題や課題を「発見」するための学習が必要です。



PRESS RELEASE

問題や課題は誰かに与えられるものではありません。発見のためには、他者への共感的な関わりや五感を使って観察する力、より広い社会を知る体験、そしてそれらを表現する力が求められます。創造性を育む力を培うために、具体的な課題をチームメイトの能力を相互に活かしつつ、学び合いながら新たな価値に迫るという学習形態を主に取っています。このように身近な事例を元に、チームで協働しながら問題を見出し、解決に向かう課題を生成しながらプロジェクトを遂行し学びを深める手法をプロジェクト基盤学修（PBL；Project-Based Learning）と呼びます。

<背景>

アメリカでは、1980年代に芸術、体育に関する能力も含めて包括的に知能を捉える「多重知能理論」が提唱され、2000年代には科学技術開発を目的とした、研究領域融合型のSTEM教育^(注1)などが国家戦略の一つとして位置づけられました。日本でも紹介され、「効率的な知識習得と創造的な課題発見・解決能力育成を両立した新たな学習プログラムの開発・実証」（経済産業省HP）を進めています。現在では、STEMにA（アート）を加えた、STEAMがアメリカで認知されています。理由としては、科学や工学の融合型研究、学習において、異なる形の中で目的に気付いたり、他者と効果的に協働したり、正確に観察するなどの力をアートに求めていると述べられています。

<研究内容、業績>

大学院教育のPBLとして、新しいカリキュラムを開発し、本年度から実施を始めました。基礎学習として、チームで価値を変容することや、チームのルール作りと相互理解の方法、大きな問題を解決するための具体的な小課題を設定するトレーニング、課題達成のための効率工程の視覚化（クリティカル・パス）といった学習などを半年間で学びます。その後、社会の中の課題を教育科学の力を使って解決するプロジェクトを遂行しながら、産学融合、研究領域融合での研究手法を学びます。最終的に修士論文で教育科学の専門の研究成果を発表しつつ、PBLをベースにした研究成果を発表する予定にしています。

現在、第1期生の7チームが、課題を特定し、活動中です。ネパールで現地の防災教育に取り組むチームや、地域の公民館活動から、地域の新しいコミュニティのあり方にアプローチするチーム、アメリカの健康教育を日本の高校で実践しようとするチームなどがあります。

現在の状況は、本専攻のHP (<https://edu.okayama-u.ac.jp/~kyoukagaku/wordpress/>) をご覧ください。

<展望>

大きく3つの展望を考えています。

- ①本専攻で培われた創造性を育むPBL型学習をベースに、幼児教育から高校、大学まで一貫したカリキュラムの開発を目標としています。教育に関わる新たな価値を生み出す力だけでなく、社会の風潮に過度に流されず、必要とされる価値を見極めることができる人を育てたいと考えています。
- ②地域社会や企業や学術研究分野において、創造的なチームリーダーとして活動できる人材を育成することが目標です。今後、タイアップできる地域団体や企業、研究機関を広げ、新たな研究領域、開発領域を拓き、より社会に近い場所での生きた課題を組み込みながらPBLを改善していきたい



PRESS RELEASE

と考えています。

③グローバル社会を見据え、日本の文化や価値の異なる外国人や海外の企業や研究施設などにより実効的なプロジェクトを可能にする、教育科学が果たす役割を示したいと考えています。

<略歴>

1970年生まれ。神戸大学教育学部卒業、岡山大学大学院教育学研究科修了、兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科修了。博士（学校教育学）。専門分野・美術科教育。

兵庫県内公立中学校、高等学校教諭、川崎医療福祉大学医療福祉デザイン学科講師を経て現職。

<語句説明>

注1 STEM教育：Science（科学）、Technology（技術）、Engineering（工学）、Mathematics（数学）の頭文字を取った、理数系教育の総称。

<お問い合わせ>

岡山大学 大学院教育学研究科

准教授 清田 哲男

（電話番号）（FAX）086-251-7663



岡山大学
OKAYAMA UNIVERSITY



岡山大学は、国連の「持続可能な開発目標（SDGs）」を支援しています。